様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　4 月　30 日現在

機関番号：12501
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520317
研究課題名（和文）　少年少女向け名作と「教養」形成
——児童文学における翻訳叢書が果たした役割
研究課題名（英文）　CULTURE BUILT BY CANONICAL WORKS FOR YOUNG TEENAGERS:THE ROLE OF PUBLISHING PROJECTS OF TRANSLATION IN JAPANESE CHILDREN' S LITERATURE
研究代表者
佐藤　宗子（SATO MOTOKO）
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：40154108

研究成果の概要（和文）：戦後日本社会には、「少年少女」という新しい読者層が生まれた。彼らは「地域割り」による「世界文学全集」の読者対象と目された。それら翻訳叢書を読む目的は、「教養形成」に寄与し、戦後の民主主義社会建設に資することであった。その際、時には読書指導者が介在し、時には少年以上に「少女」にとって必要と考えられた。またそれらの翻訳叢書はある意味で、高度成長期における「現代児童文学」の出発と発展の起点とも考えられる。

研究成果の概要（英文）：In postwar Japan, there emerged a new range of the readers 'Shonen-Shojo' (boys and girls). They were regarded as the target audience of "The World's Classics" divided according to language and country or region. The purpose of reading such a translated series was to contribute to the cultural education ("Kyoyo" in Japanese) and to build the basis of democratic society in postwar Japan. There occasionally appeared instructors to guide young readers how to read. The existence of several series especially for girls meant that the female readers were more in need of cultural education in comparison with male readers. Moreover, these translated works were, in a sense, a springboard for the coming wave of contemporary children's literature in the period of high economic growth of Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：児童文学
科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論
キーワード：児童文学、比較文学、翻訳、叢書、教養形成、少年少女

１．研究開始当初の背景

（1）研究代表者・佐藤は、長年児童文学の翻訳・再話研究に従事する中で、「叢書」という形態に注目してきた。

①１９９８年には、当時受けていた科学研究費による研究の一環として、第二次大戦後の著名な叢書二種を対比させた「選ばれた「名作」－－「岩波少年文庫」と「世界名作全集」の共通書目——」をまとめている。

②その後、いずれも科学研究費を受けた「児童文学における翻訳・再話とジェンダー意識」、「「少女」向け名作再話の成立と展開

――児童文学における翻訳叢書とジェンダー意識」の研究を継続させる中で、叢書所収作品の翻訳者・再話者の対読者意識が、書目の選定にも、個別の作品の訳出にあたっても、きわめて強く反映されていることが明らかになってきた。

（2）そこからは、第二次大戦後の少年少女向けの叢書において、叢書企画者や個別の翻訳者は「翻訳作品を読書することで、戦後の日本社会にとって望ましい「教養」が培われていく」という理想があったのではないかとの推定がなされる。

（3）そこで、戦後日本で人間形成がどのように考えられていたか、そこに海外の文学作品の翻訳がどのような役割を果たしたのかという受容状況を明らかにすることを目的とし、読者を十代の「少年少女」に設定した「叢書」群を対象として「教養」形成と「翻訳」の関係を追究しようと考えた。

２．研究の目的

（1）本研究課題は、日本における児童文学の特質を明らかにするという全体構想の一端を担うものとして、比較文学的な視野のもとに、特に翻訳・再話の領域に焦点をあて、対象となる読者がどのように意識されていたのか、そこにいかなる問題が潜んでいたのかを、「教養」形成という観点から、少年少女向けに刊行された叢書群を中心に取り上げることとした。

（2）「教養形成」という概念をテーマに据えたのは、「読書」の目的が議論されるときにしばしば「教養」という語が使用されるためである。「教養」を「形成」する過程としての「少年少女」に対して、第二次大戦後の、とくに1950年代から70年代にかけて「翻訳」の「叢書」が隆盛を極めたことを、あらためて追究する。

（3）この研究を通して、大人に向かう年齢にあたる「少年少女」期の読者に向けた文芸作品に含まれる「教養」の特質が、叢書という出版形態の中でいかに発揮されていたのか、その全体的な姿を捉えることを目的とした。

３．研究の方法

（1）はじめに、図書館のＯＰＡＣを利用して、第二次大戦後の「少年少女」を冠した叢書類の概容を把握し、その中からとくに着目する叢書を選定した。そして、それぞれに刊行状況を確認するとともに、月報や広告物、解説や読書指導ページなど、叢書の周辺資料を中心に、発信者側の意図や受容のされ方を明らかにしていくこととした。

（2）1950年代に刊行された、創元社「世界少年少女文学全集」と講談社「少年少女世界文学全集」という、二つの叢書に注目した。

①創元社の叢書において取り入れられ、講談社の叢書でも踏襲された「地域割り」という方法の実際を明らかにする。

②月報等を中心とした資料により、発信者側のメッセージと受信者側の反応の状況を順次追っていく。

③とくに収録作品に関わる「読書指導」がどのように図られていたかを追究する。

（3）戦後の翻訳叢書を考えるときに見落とすことのできない岩波書店の刊行物について、とくに「岩波少年文学全集」に焦点をあてる。

①先行する「岩波少年文庫」との関係を押さえる。

②「岩波少年文学全集」の収録作品の概容を把握する。

③月報等を中心とした資料により、発信者側のメッセージと受信者側の反応の状況を順次追っていく。

（4）その後の翻訳叢書に関しても、補足的に刊行状況を把握する。

４．研究成果

（１）研究の主対象とした三つの叢書については、ほぼ予定通りの調査を行った結果、以下のことが明らかとなった。

①創元社「世界少年少女文学全集」に関して、「少年少女」が戦後の状況の中で新たに区切られた対象であったこと、「家庭」と「学校」の二つの享受の場の両立、発信者側を含めた三者による子ども読者の「読書」への期待、発信者側が「教養」の「形成」を念頭に置いていたこと、子ども読者もそれと連動した「読書」観を抱いていたことなどが明確になった。

②創元社版と講談社「少年少女世界文学全集」はともに「地域割り」を主体にした巻構成であり、収録書目も比較的似通っており、先発の企画を後発の講談社が受け継いでいる。だが後者には、前者にはない「読書指導」のページが付されている。この検討をした結果、学校における教師の指導が

文学作品に付随していること、「特権的子ども読者」の存在が印象付けられること、「現前テクスト透過の作品把握」の可能性が大であることなどが抽出されてきた。

③また、いずれの叢書の「地域割り」も、西欧およびアメリカに重点を置いた構成である。英米・仏・独、そしてロシア、北欧、南欧と巻数および巻順が組まれており、アジアは「東洋」として一括し、別に「日本」を入れ込んでいる。

④ただし、それらの収録作品の提供にあたっては、創元社版では、少年少女読者に向けて直接に発信者がメッセージを届けるかたちを採り、文学を「教養」の柱に据えているが、講談社版では読者を指導されるべき存在として捉え、文学をいわばその材料として捉えているという差異がある。

⑤二つの叢書の後に刊行された「岩波少年文学全集」においては、先行する「岩波少年文庫」を収録作品選定の母体としており、先行二種の「地域割り」叢書とも一定の関係を保っている。その一方、書目選定にあたっては第二次大戦後の原著が多く選ばれていること、日常的作品では戦中戦後をテーマとするものやソ連・中国の作品が眼を引くこと、ノンフィクションの占める割合が高く、中でも古代史関連や社会とかかわる人物の伝記に重点が置かれていることなどに特色がある。

（2）上記三種の後に刊行開始となる小学館の叢書類についても、「地域割り」を継承した「少年少女世界の名作文学」はじめ「少年少女世界の文学　カラー版」「少年少女世界の名作」について、多少の検討を行った。それらにおいてはいずれも、「読書指導」が前提となった本作りがなされており、また英米の作品重視、いわゆる「定番」の作品重視の採択傾向などがうかがえた。

（3）「教養」をめぐる関連書からは、青年期の「教養」として「文学」はそこに含まれるものの、その一部であることがより明確になった。これに対し、少年少女期の「教養」として念頭に置かれるのは「文学」、その中でも「小説」類の比率が高い。

（4）これらの研究成果については、3 年間の間に、国内の学会において 3 回、国外の学会において 2 回、口頭発表の機会を得た。

①児童文学の分野において、これらの叢書に関する研究はこれまで皆無といってよかった状況であり、国内の学会では、新鮮なテーマ設定について、また文学作品と読書指導を関わらせた点などについて、質疑やその後の意見交換を通じて反応があった。

②国外の発表においては、「世界」と銘打たれた叢書の中に、「日本編」が含まれる点や、「東洋編」にはどのような作品が収録されているのかという関心、また台湾や韓国など、かつて日本の影響下に児童書出版が行われていた地域においても同様の発想の叢書が存在することなどの反響があった。

（5）また、期間中には叢書の研究を中心とした論文 3 編と、ほかに戦後文学を問い直す企画に依頼されて論文 1 編を発表した。前 3 編と海外における口頭発表のうち 1 本をもとに、資料編を拡充するかたちで冊子を作成した。送付した研究者からは、個別に口頭発表を聞いたり論を読んだりしただけでは把握しにくい、それら翻訳叢書の全体的位置及び意味の重要性について、賛同の声を聞くとともに、さらなる研究の進展についての期待を寄せてもらうことができた。後者の論においては、戦後日本の児童文学状況全体の中で、1950 年代から 60 年代における翻訳叢書の意味を再考する、今後の展望に向けた端緒を得られた。

（6）今後の展望としては、以下のようなことが考えられる。

①今回主対象とした、3 種の叢書について、収録書目の内実に関わって、「教養」形成との関連追究を進める。各作品の特徴と翻訳者の翻訳に際して、また読者に対しての態度をみることで、子ども読者に形成させたい「教養」の実態がより明らかになるだろう。

②今回取り扱った叢書と重なるような時期に刊行されていた、他の比較的著名な子ども向け世界文学全集についても、調査していく。たとえば偕成社「児童世界文学全集」や小学館の小型叢書「少年少女世界名作文学全集」などがそれにあたる。その際、「地域割り」の発想がになった意味についても、再考の余地が出てくるだろう。

③前述した、この後の時期の小学館刊行の 3 種の叢書について、刊行状況の調査を継続する。それにより、とくに 1970 年代を転機として、これら翻訳叢書が児童書の中で重要性を失っていった経過が明確になるだろう。

④対象とする叢書類における、「西洋」「東洋」「日本」の位置づけを浮き彫りにしていく。そのなかで、戦後日本において少年生じを対象に提示された、範とすべきものが何であったかが、見えてくることが期待される。

⑤あらためて、「教養」形成という考え方について、戦後の日本社会という場と、「少年少女」という対象とを交差させながら、検討を深める。それにより、一方では「文学」における翻訳が果たす意味を追求するとともに、他方、21 世紀の現在における「読書」への期待が何に基づくかについても、検証していくことができるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 佐藤宗子、精選と洗練の産物――「教養」追求からみた「岩波少年少女文学全集」――、千葉大学教育学部研究紀要、査読無、59 巻、2011、350-358
② 佐藤宗子、指導される「教養」――二つの少年少女向け世界文学全集にみる「文学」の役割――、千葉大学教育学部研究紀要、査読無、58 巻、2010、415-422
③ 佐藤宗子、「少年少女」の時代――戦後における「教養形成」の対象――、千葉大学教育学部研究紀要、査読無、57 巻、2009、398-406

〔学会発表〕（計 5 件）

① 佐藤宗子、精選と洗練の産物――「教養」追求からみた「岩波少年少女文学全集」――、日本児童文学学会第 49 回研究大会、2010 年 11 月 14 日、梅花女子大学
② SATO MOTOKO、Cultural Education of Young Teenagers: The Role of Translated Literature in 1950-70s Japan、The 19th Congress of ICLA、2010 年 8 月 20 日、中央大学校（Chun-Ang University）（韓国・ソウル市）
③ 佐藤宗子、指導される「教養」――二つの少年少女向け世界文学全集にみる「文学」の役割――、日本児童文学学会第 48 回研究大会、2009 年 10 月 24 日、北星学園大学
④ 佐藤宗子、「少年少女」の時代――戦後における「教養形成」の対象――、日本児童文学学会第 47 回研究大会、2008 年 10 月 11 日、愛知淑徳大学

６．研究組織
(1)研究代表者

佐藤　宗子（SATO MOTOKO）
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：40154108